

た。この希望を、東大で西洋美術史を教わった団伊能先生から矢代〔幸雄〕先生に話していただいたが、美術研究所には空席がなく、難しいということであった。ところで、私が大学を出た昭和七年の三月には、東京美術学校では、三十三年の長きにわたって校長の任にあった正木直彦先生が勇退され、正木校長に伴って何人かの長老の先生方も退職された。退職教官の中には、木口木版画家として有名な仏語の合田清講師もいた。そして私は、幸運にも、合田氏に代わって美校の仏語講師になることができたのである。これは、ひとえに矢代先生のご推薦があったからであり、また洋画の和田英作先生のお口添えも有力であった由である。同時に、卒業間際に、仏語科高等教員免許の申請に必要な仏文学の単位をぜひとるように、強くすすめてくれた吉川〔逸治〕氏の友情に負うところも大きかった。

昭和七年の六月には、和田先生が美校校長に就任された。事務の部局として経理課、教務課、文庫課ができたのはこの時で、矢代先生は文庫課長を引受けられた。この頃から先生は、従来担任されていた西洋美術史の講義を青山新氏（後の和田新氏）に譲られ、日本・東洋の美術史をお持ちになった。文庫には、図書のかに豊富な美術品のコレクションもあったが、その管理方法がすでに近代的とはいえなくなっていたので、先生は課長として文庫の改革充実をはかる決意をされたようであった。先生の文庫でのお仕事のうち、日本・東洋関係のことは、美術研究所の所員で、美校で東洋文学を講義されていた正木篤三氏——昭和八年以後は現大和文華館長石沢正男氏が代わられた——がお手伝いをし、西

洋関係のことは私がお助けした。文庫の蔵書は、当時和漢書が二万数千冊、洋書が三千数百冊に過ぎなかったが、和漢書はともかくとして、洋書は分類さえよくできていず、目録としては、丸善のアナウンスメントを切ってカードに貼りつけ、間に合わせているというような状態であった。私は図書館学の知識は何一つもっていなかったもので、先生のご指示で、図書分類法、洋書目録法などを先輩から手ほどきを受け、また本を読んで勉強し、簡単なながらも洋書の分類表を作り、またカードの作成を行なった。

文庫改革のことは、このようにして矢代先生の指導によって軌道に乗り、また必要な人員も確保していただいた。しかし先生は、美術の講義のほかに美術研究所主事としての仕事をお持ちになり、またたびたび外国に出かけられるというご多忙さであったので、美校文庫課長の方は、昭和九年から香取秀真先生にお願いされた。しかし石沢氏と私とは、それぞれ標本掛長、図書掛長として、香取先生の下で文庫の仕事を続けた。

〔矢代先生追憶〕『日伊文化研究』第十四号。昭和五十一年三月、日伊協会

⑬ 川端玉章翁記念銅柱の建立

右の件に関して『東京美術学校校友会月報』第三十一卷第二号に次の記述がある。

○川端玉章翁記念銅柱除幕式 明治畫壇の巨匠にして其の門下より多數の秀才を出したる川端玉章翁の畫業を追慕する爲めに、結

城素明、平福百穂兩氏委員となり本校構内中庭に記念銅柱を建造中なりしが、愈々其の落成を見たるに就き「昭和七年」四月十六日午後一時より除幕式を執行せり、當日玉章翁の遺子玉雪、茂章兩氏の外多數の參列者あり、又文庫陳列館には翁の遺作數十點を陳列展觀せり、尙結城素明氏は『川端玉章翁略年譜』を編纂せられ、口繪に玉章翁銅像、銅柱、銅柱六面文様文字拓本、箱根木賀^(遠)達望圖、箱根宮の下奈良屋楼上眺望圖、高輪汽車圖、帆船圖、林檎野菊圖を載せ、更に川端玉章翁略年譜、川端玉章先生追悼座談會など極めて有益なる文獻を收めたり、因に同座談會出席者は、結城素明、伊東英泰、西巻稻村、堀田善種、岡村葵園、川端玉雪、川端茂章、吉岡班嶺、竹田敬方、瀧田敬秀、高橋玉淵、村崎雅章、山田敬中、小柳渡風、工藤玉葉、江村隆章、島崎柳塙、緒崎英明、本橋文章、諸星成章の諸氏なり

なお、同誌「文庫彙報」欄には建碑式に合わせて四月十四日から二十七日まで陳列館に玉章が本校に遺した三百五十点余りの作品中主なものを陳列した旨記されている。

⑭ 黒田清輝胸像の除幕

昭和七年十一月二十七日、黒田清輝胸像の除幕式が行われた。これより先き、昭和三年九月、岡田三郎助、白瀧幾之助ら関係者二十四名が発起して資金を募集し、原型を高村光太郎に委嘱。完成した胸像は本校と美術研究所に寄贈された。本校における除幕式の模様を同年同月二十八日付『大阪朝日新聞』は次のように伝えた。

黒田清輝子の胸像除幕式 美術學校で

洋畫界の恩人故黒田清輝子の胸像除幕式は二十七日午後二時より東京上野の美術學校講堂において小林萬吾畫伯主催の下に舉行された。嗣子黒田文紀子、故子爵の大作『湖畔』で有名なてる子未亡人はじめ親族友人および多數の名士參列し岡田三郎助氏の式辭をもつて式ははじめられ、文紀子の除幕、白瀧幾之助氏の經過報告、胸像贈呈の儀がありこれに對し正木美術院長、和田東京美術學校長の謝辭があつて來賓の祝辭に移り、鳩山文相（東郷政務次官代讀）宮田光雄兩氏これを代表し最後に親戚總代榉山愛輔伯の感謝の挨拶をもつて同三時式を終り、胸像は永く美術學校校庭にあつて一段の光彩を添へることゝなつた（東京）

高村光太郎は「自作肖像漫談」（『知性』第三卷第五号、昭和十五年五月）『高村光太郎全集』第九卷所収）に、この胸像について次のように



高村光太郎作 黒田清輝像 昭和7年